

<総評>

抒情やメッセージではなく、事象によって動かされる感覚。コロナによってその感覚が抑圧される現状があります。そのための砦は何か。繊細かつ新しい感性の発現を探してみました。

我らコロナチルドレン  
進め！  
密封殺菌された情熱と  
一律接種した感性を胸に

---

コンスタンティノーブル小林 東京都

——嫌ですねえ、情熱が密封殺菌されて、感性が一律接種となれば文芸は絶滅です。コロナの現実をズバリと言ったのけました。

意味なんか分からないけど  
怪獣の雄叫びだってその星訛り

---

他人が見た夢の話 茨城県

——他人の夢と同じくらい意味なんか分からないことばかりの世界です。唯一、訛りというのは最後に残された感性の砦のようなもの。薩摩訛りと津軽訛りの怪獣が戦ったらいよいよ分けわからなくなるかも。

ベランダに斧のかたちの影を撒き  
花瓶の水で喉を潤す

---

北上 郷夏 山梨県

——狂気の形象化。

優しいと 言われるたびに  
浮き上がる 胸の深部を  
満たす暴力

---

モラン 神奈川県

——優しくあるべきと刷り込まれる世界。人と人の真のコミュニケーションはそこには無い。そこを突き抜けるのは暴力の力。

あなたには 解からないから  
言いません どれほどそれに  
救われたのか

---

モラン 神奈川県

——戦争に行った世代はその体験を語らない人が多いといいます。それは悲惨を語りたくないのではなく、語っても分からないからと。言わないことの必然。解らないことの平和。

マイナンバーカードに  
保険証がつき  
私という名五グラム重い

---

小林紅石 埼玉県

——姓名という仮物が様々な役割を負わされるようになる不安。

オンライン授業を受ける子の背中  
コロナ時代の語り部の背中

---

さくらママ♪ 兵庫県

——やがて、あの時から時代が変わったんだよと昔語りになるのでしょうか。それとも？

鮮やかな母はまたただあからさま

---

中矢 温 東京都

——世間通念としての「母」ではなく、「鮮やかな」母は「またただあからさま」なのだ。

僕は

殴る

啄木は

改行する

---

立花ばとん 東京都

——世界あるいは現実を変える方法は幾つもある。僕は殴る。啄木は改行分ち書きをすることでそれをやった。そう違わないのではないだろうか？

創作とはつまり

全てを相対化したがる  
魔物との戦いだ

---

降旗 沃 東京都

——絶対はダサイ。相対こそカッコいい。どんどん相対化していくと足が抜けなくなるかも。

低く ひくく  
花は湖面に近付いて  
子を成すための器官のはなし

---

さいう 愛知県

——低く、もっと低く、近づくが決して触れない距離の官能性が花と水との関係なのだ。

祈りとは一種の依存  
陽に近い人から  
影が濃くなってゆく

---

さいう 愛知県

——祈りと依存とは分かち難い宿命。なぜなら光が強ければ影も濃くなるから。

集団の  
中学生に  
うずもれて  
大丈夫なよな  
そうでないよな

---

桜咲 千葉県

——中学生の集団という何だか分からないものに埋められると、どうすればよいか少し不安になる。顔付きとか歩く速度とか。知らないふりとか少し笑うとか。

二階から  
降りてくるこの足音は  
まだ降る雪に気づいていない

---

郡司和斗 茨城県

——雪はなぜか人の気持ちを乱さずにはいない。いつもの足音にさえそのことが分かる。